# 仙台 2021 まちづくり若者ラボ

活動報告

## もくじ


03 「仙台まちづくり若者ラボ」について
事務局・メンター紹介

04 活動の流れ
ワークショップ
最終報告会

06 チーム紹介/最終報告会プレゼンダイジェスト

チーム① 仙台っ子Craftsめん

チーム② Busy Bees

チーム③ #仙台ただいま転勤中

チーム④ Project HIKARU

チーム⑤ 1000 Diver-City

チーム⑥ 商店GUYS


「仙台まちづくり若者ラボ」について

## 『みんなとつくりたい仙台がある』

仙台市では令和2年度から、若者の自由な発想を仙台の活力創出につなげるため、
「仙台まちづくり若者ラボ」を実施しています。
この事業は、若者自らが「自分ごと」として関われるまちづくりに関するテーマを設定し、
ワークショップとフィールドワークといった実践型プログラムを通じて、
そのプロセスや成果を発信するとともに、まちづくり活動の担い手となる若者の発掘・育成を目指すものです。
今年度は、基本コンセプトを「みんなとつくりたい仙台がある」と設定し、
若い世代の参加者が6つのチームに分かれて、「まちの特派員」として自らの視点で取材活動を行いました。
各チームには参加者と同年代のメンター（指導・相談役）を配置し、プロジェクトの進捗管理や
フィールドワークの伴走支援、他団体との連携支援などフォロー全般を行い、活動をサポートしました。

### 事務局・メンター紹介

イベント企画・ファシリテーター
(株)JTB仙台支店 地域交流グループ
手島 慧さん

イベント企画・運営担当者
(株)JTB仙台支店 地域交流グループ
野村 倫太郎さん

お茶の井ヶ田(株)所属
石垣 直哉さん

住友商事東北(株)所属
加藤 海さん

(株)河北新報社所属
丹野 裕太さん

(株)リクルート所属
小野 拓也さん

フリーランス
村岡 葉子さん

hito-koto代表
前川 雅尚さん

## 活動の流れ

全4回のワークショップでは、TOHOKU360編集長の安藤歩美氏を迎えての講義や、各チームに分かれてグループワークを行いました。

| 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 最終報告会 |
|---|---|---|---|---|
| ワークショップ 7月6日 | ワークショップ 8月24日 | ワークショップ 10月6日 | ワークショップ 11月2日 | 12月1日 |
| フィールドワーク | フィールドワーク | フィールドワーク | 自主ワーク+フィールドワーク | |

## ワークショップ

- 第1回：・安藤歩美氏による講義「地域の魅力の見つけ方」　・グループワーク
- 第2回（オンライン開催）：・安藤歩美氏による講義「市民に伝わる発信の仕方」・進捗報告
- 第3回・第4回：・中間発表　・最終報告会発表テーマの決定　・最終報告会に向けたグループワーク

## 最終報告会

令和3年12月1日、仙台市市民活動サポートセンターで開催しました。

今年度は33名の参加者が、それぞれが掲げたテーマに沿って、まちの未来を「自分ごと」に引き寄せ、約5カ月間の議論を重ねてきました。そして迎えた最終報告会では、これまでの活動を通して得られた発想やアイデア、今後継続的に取り組むアクションについて、一般観覧者及び市長等関係者の前で発表しました。その活動の様子を、本誌及び仙台市公式動画チャンネル「せんだいTube」で紹介いたします。「自分ごと」として関わる、新しいまちづくりの形をぜひご覧ください。

YouTube

チーム①

# 仙台っ子 Craftsめん

ステンドグラスのようなまちを目指し、
地域を担う職人クラフトメンを生み出す

**Mentor** 石垣直哉 **Member** 岩間響平／菅田優美／竹内健人／モンデル／山城美緒

テーマ
## 子どもの原体験の場の創出

### Fieldwork フィールドワーク先

仙台つーしん 佐々木さん フィールドワーク ①

MARUFES 菊田さん フィールドワーク ②

青葉区中央市民センター 間宮さん フィールドワーク ③

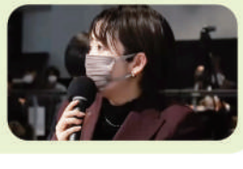
### Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

仙台というまちについて、メンバーで意見を出し合ったところ「暮らしやすい」という意見が多かった一方、「観光できる場所が少ない」「コンテンツが少ない」などのネガティブな意見も出ました。話し合いを重ねる中で、もっと面白い地域になるためには「仙台に愛着を持つ人が増えたらいい」という事になり、そのために必要な要素を考えました。

最初に、「仙台の面白いものを積極的に発信することが、愛着につながるのではないか」という仮説を立て、仙台つーしんの佐々木さんにお話を伺いました。仙台にはすでに面白いものが沢山あるにもかかわらずそれに気付いていない、面白がることが出来ていない、などのお話を伺い「仙台の面白さに気付く人や、ノリの良い人が増えれば」という考えに至りました。
それを踏まえて次は、仙台で起業されたMARUFESの菊田さんにお話を伺いました。仙台を選んだ理由や愛着についてお伺いし、地域に愛着を持つために重要なのは教育である、という考えに触れ、その後メンバーで話し合い「愛着を持つためには子ども時代の思い出や原体験が重要である」という意見にまとまりました。そこで、子どもたちが体験できる取り組みを行っている青葉区中央市民センターの間宮さんにお話を伺いました。市民センターでは、子どもたちにはアプローチできているが若者の来訪が少なく、理想としては多世代交流によるコミュニティを形成し持続させていきたい、という想いがあることがわかりました。

以上のことから、私たちは市民センターを起点とした多世代交流を提案します。仙台は転勤者が多く、仙台の外で育ってきた子どもも多いため、様々な人との交流から家族ぐるみのつながりを生み、仙台を一時的に離れても戻ってきやすい環境づくりを行っていきます。相互交流を生む取り組みとして「フォトロゲイニング」を提案します。フォトロゲイニングとは、配られる地図をもとにチェックポイントを回りながら写真を撮影し、得点を競う競技です。イベントを通して、様々な人たちのつながりを生みながら仙台の魅力を見つけ出し、また、それが子どもの頃の原体験となるきっかけにしたいと考えています。
子どもたちがその地域、その場所で原体験を繰り返して、地域マスターのような存在になることにより、そこが自分の輝ける個性を発揮できる場所となって、家族も巻き込んで地域に対する愛着が得られるのと同時に、様々な個性を持った子どもたちがその地域独特の色を生み、それぞれの色を持った地域が集まることで、仙台全体がまさにステンドグラスのように光り輝き愛着のある場所になるのでは、と考えています。

### TOHOKU360編集長　安藤 歩美氏のコメント



多世代で交流できるような講座は実際に少ないので、とてもいいなと思いました。仙台の人は、仙台というまちに誇りを持っていながらも、自信を持ってそれを表現できていないように感じます。この企画のように、外から来た人たちと交流して自分から仙台の良いところを話せる場があることで、意識も変わってくるのではと思いました。



チーム②

# Busy Bees

ミツバチが自分の巣へと蜜を運ぶように
数珠つなぎに広がる人と人とのつながり

**Mentor** 加藤海 **Member** 五十嵐太郎／池谷圭介／佐藤有莉佳／庄司昌仁／レイチーチョウ

テーマ
## Link To Next Treasure～数珠つなぎで広がる知り合いの縁～

### Fieldwork フィールドワーク先

仙台ふららん 稲葉さん フィールドワーク ①

原町商店街 現地調査 フィールドワーク ②

アンケートの実施（若者ラボ参加者へ） フィールドワーク ③

### Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

第1回目のワークショップで、仙台の足りないところ、もっと良くなるところを書き出したところから、私たちは「人と人のつながりをつくること」「仙台の魅力を伝える情報発信者をつくること」を中心にディスカッションしてきました。

最初のフィールドワークでは、仙台ふららんの稲葉さんにローカルな情報発信についてお話をお聞きし、まちの最小単位とも言える商店街に着目してはどうか、というアドバイスをいただきました。そこで、2回目のフィールドワークでは原町商店街でまち歩きを行いました。そこで気づいた、商店街に人通りが少ないことについてメンバーで話し合ったのですが、なかなか「自分ごと」に落とし込むことができませんでした。ただ、一緒に歩きながら会話するまち歩き自体はとても楽しく、お互いの交流を深めることができたため、この若者ラボ自体が知らない人と出会う機会として「気軽につながる」ことがとてもいい、という話になりました。一方で、若者ラボ自体への参加のハードルが高いのではないかという話になり、そのハードルを越えられないけれど人とつながりたいという人もいるのではないか、そのような人たちが気軽に参加できるやり方はないか、という考えになりました。
そこで3回目のフィールドワークとして、積極層と中間層の違いを知るために、若者ラボの参加者を対象にアンケートを行いました。アンケートから、参加者の3/4が参加にハードルを感じていて、若者同士がつながるチャンスを増やすためには、一緒にプロジェクトをつくり上げる経験が必要、という意見が多いことが分かりました。このことから、参加にはハードルがあっても知り合いと一緒なら参加しやすいのではないか、と私たちは考えました。

話し合いを重ね、私たちは「気軽につながることができる最初の一歩としてのイベントを企画する」という考えに至りました。ターゲットとしては、つながりたいけどつながれない若者を対象とし、雑談などの場を通じて数珠つなぎの縁を広げていくイメージを考えています。4回目のフィールドワークは、お試しとしてメンバーとメンバーの友人で、仙台のボードゲームカフェで交流を行いました。今後は「ゆるいつながりが広がれば、仙台はもっと魅力的なまちになる」というイメージのもと、様々な人たちとのつながりを大切にしていきたいと考えています。様々な組み合わせでいろいろな交流の場づくりをすることで、数珠つなぎにコミュニティが広がり、仙台の魅力がより上がる、その小さい一歩をお手伝いできればと思っています。

### 仙台市長　郡 和子のコメント

リアルなつながり、というのがすごくカギになってくるのだろうと感じています。ここが好きだな、あそこもいいな、とそれぞれが思うところを開催地に選んで交流して、コミュニケーションを深めていくという皆さんの提案に、コロナ禍の今の時代だからこそ、改めてリアルの大切さというのも感じました。

チーム③

# #仙台ただいま転勤中

ひとつのハッシュタグから始まる
誰も取り残さないまちづくり

**Mentor** 丹野裕太 **Member** 菅野修吾／谷川千尋／根本かほり／星川智洋／マニ／山田うみ

テーマ
## 転勤者のコミュニティ形成・マッチング

### Fieldwork フィールドワーク先

ホステルKIKOさん（勝水さん、田村さん）フィールドワーク①

仙台市職員 大山さん フィールドワーク②

仙台つーしん 佐々木さん フィールドワーク③

### Presentation 最終報告会　～プレゼンダイジェスト～

最初に、仙台がどんなまちになればいいかということを話し合い、「自慢できるまち」「楽しめるまち」「飽きないまち」というゴールを決めていき、話し合いを経て「人と人のつながりを強固に」をテーマとして進めることにしました。

1回目のフィールドワークでは、若林区の荒町商店街にあるホステルKIKOさんにお伺いしました。スタッフの勝水さんと田村さんのお話からテーマを深掘りし、具体的なターゲット層を地域とのつながりが少なそうな転勤者と設定することにしました。また、地域からの情報発信がうまくできていないため、転勤者が情報を受信できていない現状があるのではないかと考え、転勤者向けの情報発信として、人とのつながりをSNS上でつくり、その後リアルイベント開催も視野に入れたいと考えました。
そこで2回目のフィールドワークでは、仙台市職員の大山さんに、転勤者の特徴や企画アプローチの方法についてヒアリングをしました。大山さんは、地下鉄東西線開業を契機に行われた市民講座「WE SCHOOL」のメンバーで、そこからの派生で「転勤族チーム」を発足し活動をする中で、転勤者を含む仙台初心者はSNS上で情報を探すという傾向を見出したそうです。そこで私たちは、転勤者がつながりをつくりづらい課題、コロナ禍で簡単には集客できない現状、私たち若者ができる転勤者向けの情報発信、を考えることにしました。そこから、転勤者が仙台を離れてもまた遊びに来てくれるような思い出や人とのつながりが重要であると考え、ハッシュタグ「#仙台ただいま転勤中」を使い、共通の想いを持った人がつながること、コミュニティづくりができるようになることを目標に、投稿を始めました。
3回目のフィールドワークでは、仙台つーしんの佐々木さんにSNSの活用方法を中心にお話を伺いました。情報を発信するだけでなく情報が欲しいということも明確に伝えて書く、読み手のニーズやハッシュタグをつけた人にもメリットがあるところに情報が集まる、というSNS活用のポイントを学びました。

私たちは、次の3つのステップでこれからの企画を進めていきたいと思います。1つ目に、ファンを増やすため4月までに100人のフォロワー獲得を目標に記事を投稿していきたいと思います。2つ目に、ホステルKIKOさんにお力をお借りしながらイベントを実施していきたいと思います。そして3つ目に、自走化することが大事だと思うので、様々な人たちを巻き込みながら情報発信や企画を行っていきたいと思っています。つながりをつくるための企画として、地元の飲食店にご協力いただき、大山さんの転勤族チームに絡むプロジェクトを行うなど、幅広く持続的に行える企画を増やしていきたいと思っています。

### 仙台市市民局長　佐藤 伸治のコメント

県外から仙台に来られた方々を、私たちのコミュニティに温かく迎え入れることができるということ自体が、仙台の優しさや柔らかさをアピールすることにつながると思いますし、それが日本全体に向かって有形無形に広がるような、何か期待が膨らんで非常に楽しい企画でした。この仙台で育って欲しいと感じました。



チーム④

# Project HIKARU

携わる全てのメンバーが光り輝き、
新しい起業の形で仙台の未来を照らす

**Mentor** 小野拓也 **Member** 遠藤香奈／狐野彩人／齊藤友記／長久保光生／フェイ／牧野佳奈恵

テーマ
## まちの皆が起業のサポーター

### Fieldwork フィールドワーク先

(株)Owner 佐々木さん フィールドワーク①

起業支援家 Kさん フィールドワーク②

### Presentation 最終報告会　～プレゼンダイジェスト～

私たちが最初に行ったことは、仙台と福岡の比較です。グルメ、ビジネス、建造物、文化、いろいろな部分で比較していった中で、私たちはビジネスという観点に注目しました。政令指定都市の起業意欲の調査では、福岡が1位である一方、仙台は11位と遅れをとっており、仙台と起業には何かしら距離感があるのでは、ということを考えました。

最初に、(株)Ownerの佐々木さんにお話を伺いました。佐々木さんは、事業案をゼロからひとりで考えたのではなく、他の人が考えた事業案を託される形で社長に就かれたそうです。人の事業を託される起業の形もあることを知り、想いを託す・託される形の起業の仕組みがあれば、仙台のまちがもっと面白く、活気のある場所になるのではないか、と考えました。

そして、私たちは若者ラボを通して実験をしてみようと考えました。メンバーの一人が勤務先でビジネスコンテストを控えていたため、チームがサポーターとなって事業を一緒に考えていくことにしました。
まず、新規事業のつくり方を勉強するために、起業支援家のKさんに協力いただきワークショップを行い、「価値軸」という観点で客観的に事業を考えていくこと、イメージするだけでなく実際のフィールドワークやヒアリングが重要であることを学びました。
次に、新規事業のヒントを得るために、メンバーの身近にある不便なことを出し合いました。その中で、毎日会社に届く備品が入った段ボールの処理が大変、という不便なことに注目し、梱包用の段ボールをオリコンと呼ばれるプラスチック製の折りたたみコンテナに変更する、という事業を考えました。東北ではまだ行われていない事業であるため、まずは仙台市内でエリアを限定してオリコンの配達・回収を開始していく計画です。企業と仙台市が協力してこの事業を行うことで、環境に優しい仙台のまちづくりを実現していけると思います。

活動を通じて私たちは、起業を身近に感じることができ、起業と自分の身の回りの課題を関連付けて考えることにより、起業についても「自分ごと」として取り組める、という仮説に至りました。
「仙台」を主語にするのではなく、「自分たち」を主語に、自分たちはこういう課題を持っているから、仙台というフィールドでこういうことをしていこう、これによって仙台はもっと面白くなる。このように発想することによって、結果的に持続的な取り組みが生まれると、私たちは考えています。

### TOHOKU360編集長　安藤 歩美氏のコメント

起業というのは、始めるハードルは低いのですが、続けるハードルが高いものだと思います。起業ではなく、まずは社員として、フリーランスとしてなど、人それぞれに合ったやり方でチャレンジすることができる、ゆるいプラットフォームを作ることができれば、仙台の起業の厚みが出てくるのではないかと思います。ぜひ実現して欲しいです。

チーム⑤

# 1000 Diver-City

仙台だけに留まらず全ての都市の課題
一人一人の「食」の形と向き合う

**Mentor** 村岡葉子 **Member** 相澤拓斗／菊地航平／小泉晴香／近藤志乃／鈴木悠平／山元洸生

テーマ
## 多様性に寄り添う食の都・仙台へ

### Fieldwork フィールドワーク先

- フィールドワーク① Halal Hub マムンさん
- フィールドワーク② SenTIA せんだい留学生交流委員
- フィールドワーク③ 味工房 古山さん
- フィールドワーク④ Tregion 仙台エスパル店 清水さん
- フィールドワーク⑤ 宮城県観光プロモーション推進室 成田さん

### Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

私たちの命を支え、暮らしを豊かにする食を、その土地に住む、そしてその土地を訪れるだれもが等しく楽しむことができる、仙台をそのような多様性に寄り添った都市にしたいという想いから、「多様性に寄り添う食の都・仙台へ」というテーマを設定しました。

まず私たちは、ハラル料理を提供するHalal Hubのマムンさんにお話を伺いました。宗教に関する正しい知識や教育についてのお話のほか、ハラル対応店やその情報が少ないため、仙台を第二のふるさとにしたいが現状では難しい、ということを伺いました。次に、公益財団法人仙台観光国際協会(SenTIA)で「せんだい留学生交流委員」をしている留学生の皆さんにお話を伺い、日本は宗教への食の配慮や食品表示の情報が少ないため、外食を諦めて自炊中心の生活をしているという、留学生の現状を知りました。

これらを踏まえて、どれだけの人が食について悩みを抱えているのかを把握するため、日本人も含めてアンケートを実施しました。その結果、食の悩みは単に仙台や日本にいる外国人だけの問題に留まらず、アレルギーや宗教、ビーガンやベジタリアン、その他の食に関する好みや制約がある人たちが、私たちの想像以上に多くいることが分かりました。アンケート結果を受けて、次は飲食店や宮城県の意見を調査することにしました。
飲食店の方からは、味工房の古山さんとTregion仙台エスパル店の清水さんにお話を伺いました。飲食店の規模によって対応できることに違いがある一方で、ハラルなどに関する勉強会などがあれば参加したいという積極的な意見をいただきました。宮城県観光プロモーション推進室の成田さんのお話では、外国人観光客向けの取り組みと、外国人生活者と共生する取り組みを同時に進めることでより良い結果が得られる、という印象的な考え方を伺いました。

以上の課題点は、食に制限がある人とそうでない人との間に、食に対する意識と知識のギャップがあるためではないか、と私たちは考えます。そこで、私たちは「1000 Diver-City」というプロジェクトを立ち上げ、イベントを開催し、そのギャップ解消を目指します。
外国の方に自国の料理をつくってもらうイベントの開催や、宮城県民に親しまれている芋煮を用いた交流会などを考えています。参加者が食材の買い出し等を共同で行うことにより、相互理解を深められるように工夫して行います。さらに、ハラル料理講座や講習会も行い、難しそうというハラルのイメージの払拭を目指していきます。
以上の活動はSDGsの理念に基づいて開催することを考えており、私たちのこの活動を通して、大きな目標である持続可能な社会形成に向けて貢献できればいいなと考えています。

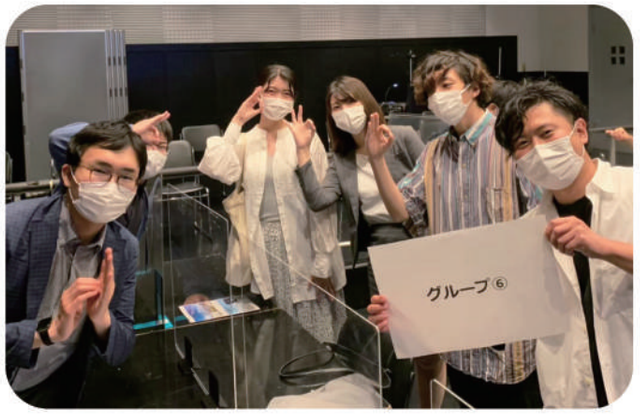
### 仙台市長　郡 和子のコメント

この課題については、仙台市としても大切なことだと認識しています。「1000 Diver-City」というチーム名や、「多様性に寄り添う食の都・仙台へ」という彩に満ちたワードに、とても想いが込められているなと感じました。コロナ禍という厳しい状況の中、これだけ様々なフィールドワークをされたことにも敬意を表したいと思います。

チーム⑥

# 商店GUYS

学生がデザインする広告で
商店街を元気にする




**Mentor** 前川雅尚 **Member** 植田由依／今田翔平／佐々木久歌／武藤輝美／山本智宙

テーマ
## 商店街×公共交通×デザイン 新しいまちづくりのカタチ

### Fieldwork フィールドワーク先

- フィールドワーク① 仙台市内各施設にて（せんだいメディアテークなど）

### Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

皆さんは普段、商店街に行きますか？私たちは商店街をもっと身近なものにしたいと思い、様々なことを考えて参りました。

まず、私たちが課題として感じたのは「情報の不足」です。そこで、最初にフィールドワークとして、せんだいメディアテークや市民活動サポートセンターなど、仙台市内の様々な施設を回ってチラシを集めました。次に、仙台市運営のSNSについて調査しました。チラシには、まだまだ私たちが知らない情報がたくさんあり、SNSについては、仙台市運営の包括的なものは存在しないということに気づきました。私たちに伝わってこない情報には、地域の身近な魅力が詰まっており、その発信が足りていないと感じました。

これらを踏まえて、伝え方のひとつのアイデアとして、公共交通機関の広告を利用したいと考えています。通勤・通学などの日常生活の中で情報に触れることができ、地元の人などへの宣伝にもなるのではないかと思います。広告のイメージは、商店街の魅力を知らせるポスターや、HP・SNSにつながるQRコードの掲示を考えています。公共交通機関としても、商店街と協力することによって、商店街へ行く手段としての利用促進や日常的な利用につながることが見込まれ、公共交通機関の広告の空きスペースの有効活用や、利用者が限定的であるという課題への解決につながるのではないかと思います。
ポスターのデザインは、普段、まちづくりに参加する機会が少ない学生から公募することを考えています。学生としても、仙台市の事業に関わることができ、デザイナーとして成果を上げることでその後のキャリアにつながっていくのではないかと考えています。実際に、このアクションプランについて商店街や学生にヒアリングを行ったところ、「素敵なアイデアだ」と言っていただけた商店街もあり、デザインを学んでいる学生からは「参加してみたい」という声が8割を超えました。
このアクションプランを実現することで、仙台市内の商店街の発展や、これから地域をつくり上げていく若者の成長の場の創出、仙台市のさらなる経済成長の実現に寄与することができ、SDGsの「住み続けられるまちづくりを」という目標にも貢献できるのではないかと考えています。ぜひご検討いただければ幸いです。

### 仙台市まちづくり政策局長　梅内 淳のコメント

商店街には、後継者の問題などを抱えているお店も多くあります。しかし一方で、地域にとっては非常に重要な存在であり、商店街応援の割増商品券がすぐに完売するところもたくさんありました。皆さんの発表を伺って、新たなお客さんを引き込むことへの工夫の必要性を改めて感じました。

## 当日の様子や最新情報を発信中

仙台まちづくり若者ラボの活動の様子や最終報告会の様子はYouTubeで、
その他新しい情報などは各種SNSで配信中です♪

Follow Me!!!

YouTube　Instagram　Facebook　Twitter


編集・発行

主　催：仙台市
協　力：ONE TOHOKU / 仙台市市民活動サポートセンター
事務局：(株)JTB 仙台支店